

団体名	公益財団法人 箕面市国際交流協会						
事業名	【留学生と地域がつながる場】～come cafe de 防災～						
実施期間	2018年6月30日～ 2019年1月30日						
場 所	箕面市立多文化交流センター						
参加者数	外国人留学生	その他外国人	日本人学生	地域住民	スタッフ 大学関係者	その他 (来場者等)	合計
	50	30	18	34	22	150	304名

<実施内容>

大阪大学に隣接し、約100カ国2800人の外国人市民を擁する多文化な箕面市の地域性が持つ潜在的な力を拡大・可視化させ、欧米に偏重しない交流や異文化理解を促進することを目的に、本事業を行った。留学生をインターンとして採用し、留学生、日本人学生、在住外国人、地域住民、関係団体、協会職員などで構成された企画委員を組織し、そこでの対話と議論を通じて、継続的な関係性を築き、対象者を限定しない地域に開かれた異文化交流のイベントを複数回開催した。

・留学生をインターンとして採用し、企画委員を組織

2018年度(平成30年度)のインターンとして、マレーシア、ロシア、中国からの留学生を採用。留学生地域交流事業の担当としては、大阪大学に通うマレーシアからの留学生が運営に携わることとなった。他のインターンは国際交流協会での業務補助として各種の地域事業を経験しながら本事業にも補助的に参加した。

インターン以外にも、留学生、日本人学生、外国人市民、日本人市民など様々な属性を持つ地域住民を企画委員として組織し、定期的な月例ミーティングを持つこととした。

・自分たちの必要な場を、自分たちが作る

当初の予定では、留学生をなどによる企画委員会が中心となり、センター内のコミュニティカフェでマルシェなどのイベント開催を予定していた。しかし、6月30日に開催した第一回月例ミーティングで、その2週間ほど前(6月18日)に発生した大阪北部地震に際して、震災後の不安を周囲の人々と共有する機会とそれを地域で受け入れる体制が整っていないことに対して、企画委員から不満の声が上がった。

平時から地域住民との関係性がないために、非常時の不安がそこに長く在住する日本人よりも大きいにも関わらず、その不安を話せる場所がないこと。また、余震を伝える緊急地震速報や、避難勧告、避難指示は、日ごろ目にする日本語とは違う専門用語のため細かな内容を理解することは至極困難で、より一層不安を煽られたという意見が出された。

このことから、当初のテーマである「地域住民との交流・相互理解」を発展させ、「緊急時に対する措置の改善を受動的に待つのではなく、不安を小さくするために自ら積極的に取り組むこと」、換言すれば、「自分たちの必要な場を、自分たちで作る」をテーマに本事業を進めることとなった。

・防災についての語り合いカフェを開催

語り合いカフェの開催を予定していた9月30日が台風24号接近のため中止となり、延期となった。2018年は被災の記憶がうすれる間がないままに、6月の地震、7月の豪雨、8月の猛暑、9月の台風といくつもの自然災害に見舞われた。ファシリテーターに、かつらのぐちゆいさん(大阪大学文学研究科臨床哲学博士後期課程)、鈴木徑一郎さん(大阪大学共創機構 特任助教)、を迎え11月4日に開催した「語り合いカフェ」には13名が集い、各自の思いを話し、互いに聞く場所となった。

・協会主催イベント 多民族フェスティバルでの出展

箕面市市民安全施策室やOFIX(大阪府国際交流財団)とも協力し、協会主催の恒例イベント【多民族フェスティバル】の中で、防災コーナーを設けた。非常食として広く使われているアルファ化米を実際に使った炊き出し体験、長期保存パンの配布、災害時や避難所で使えるアイデアQ&Aなどの情報提供などを行った。またOFIXとは、留学生による震災の体験談ブースを作り、地域の人たちと災害・防災をキーワードに対話する場をもった。

会場内に設けられたコミュニティFM局【タッキー81.6みのおエフエム】による中継ブースでは、企画委員から2名の留学生が、自身の体験などを話し、地域に向けて発信した。留学生を始めとした外国人市民と日本人の間にある思い込みや、先入観があることにお互いが気付く取り組みとなった。

・みのお市民人権フォーラムへ参加、市職員研修で講師としての参加

12月9日みのお市民人権フォーラム「その時、何が起こったのか！大阪府北部地震を振り返って～」に、企画委員が参加した。

1月17日箕面市職員向けの研修として開催された、「災害を通して見えてきたこと～多文化がともに暮らす地域づくり～」には、企画委員の留学生と外国人市民がパネリストとして参加し、外国人市民の視点から発言を行った。地域住民の中に、留学生そして外国人市民を含めることの重要性は、すべての人のためになることを、外国人当事者の立場から発言し、地域で災害対応にあたる市職員(約70名)に理解を求めた。

・防災に対する先進的な取り組み団体を企画委員と共に視察

企画委員からの発案で、同じ箕面市内でまちづくりに取り組み、災害支援を通して全国各地とつながる「特定非営利活動法人暮らしづくりネットワーク北芝」と、阪神淡路大震災の際にボランティアの拠点となり、その後も在住外国人と共に地域づくりを行っている「特定非営利活動法人たかとりコミュニティセンター」の2か所3団体を視察し、先進的な取り組みについて学ぶ機会を得た。

<記録写真>



企画委員の月例ミーティング中



多民族フェスティバルでの様子



たかとりコミュニティセンター 視察

<参加者からのコメント>

ホーリーシンさん(マレーシア)/Ho Lee Sing(Malaysia)

渡瀬絢美さん(日本)/Ayami Watase(Japan)

Through our visit to a cultural centre, I got to know that rescue parties mobilised after an earthquake usually faced a problem in helping the elderly who would refuse help and ask rescuers to help others first. Essentially, this is similar to the situation faced by foreigners living in Japan, who are assumed to be doing fine until they reach out to others. The key difference is that they lack the knowledge about where to get help and face a language barrier. Admittedly, they are given translated guidebooks with crucial information that will come to help, but that does not connect them with the local community. To that end, I think that more groups similar to this, that will allow individuals of different backgrounds to share their viewpoints, experiences and support, can go a long way in connecting not just foreigners with locals, but will also shed light on issues that need to be addressed within the Japanese society as well.

From our visit to TCC, I realised that when a severe disaster happens, all of us become troubled and tend to care only about ourselves. At that moment, inner prejudice may easily present itself in the form of violence towards minorities. It is great to note that community radios launched after 1.17 have played an important role in the community, and continue to do so. With that in mind, I would like to know more about how they've continued to keep those projects going. I really appreciate this group because we can talk about various topics that are all related to surviving hardships or problems we might face in the future.